

C o C o 壺番屋創業者・宗次徳二氏が講演 波瀾（はらん）万丈の生き様を赤裸々に



コロナ禍で延期されていた異業種交流会「第39回東海財界倶楽部例会」（中部財界フォーラム社主催）が4月21日、名古屋・東桜のホテルオークラレストランで開かれた。宗次ホール代表でカレーハウスC o C o 壺番屋創業者の宗次徳二さん（72）が、波瀾（はらん）万丈の生き様を赤裸々に語った。

◆不遇の時代から脅威の3流経営者へ◆

「非嫡出子（婚外子）として産まれて児童養護施設に預けられ、3歳で宗次家に引き取られた」と話した。しかし、養父はギャンブルにのめり込んで家庭を顧みず、赤貧から各地を転々。8歳で夜逃げするように名古屋にたどりついた。養父に言われるがまま競輪場で落ちている当たり券を探し、パチンコ店ではタバコの吸い殻を拾う生活。大曾根では日雇いのアルバイトもして「高校生までは不遇の時代だった」。

1974年、26歳で喫茶店を、78年にC o C o 壺番屋1号店を開いて以降は仕事が面白くて仕方なく、「経営における失敗はない」「常に右肩上がり。社員の給料も上げ続けた」と仕事に熱中した。2002年、「やりつくした」と53歳で引退。経営以外、関心がなくて友達も作らず、現役時代は飲みに行くこともなかった。「脅威の3流経営者」「天涯孤独」「変人」などと異名が付いた、という。

◆寄付は究極のぜいたく。財産全て使う◆

趣味は「水まき」と「寄付」。寄付は、03年に宗次氏が創立したNPO法人「イエローエンジェル」が原点。音楽、スポーツ、福祉、ボランティア等の分野において、夢や目標を持ち

続け努力している人々を応援している。05年にはハウス食品に夫妻で持っている壺番屋の持ち株すべてを売った。その時の預金通帳を見て、「これは社会にお返ししようと、妻と話した」という。寄付は、「究極のぜいたく。気持ちいい」と話し、「死ぬまでに財産を全部使う」と強調した。現役時代と同様、午前3時55分に起床し、名古屋・栄の宗次ホール周辺や広小路通りの花々に水をやる。清掃作業もほぼ毎日続けている。

◆人生は助け合い◆

ホームレスを見かけると1000円渡す。缶酎ハイに消えるのはわかっているが、「見て見ぬふりはできない」と。「目の前におぼれる人がいたら手を差し伸べましょう」と呼び掛けた。「余裕ができたらやろう、と言う人はずっとやらない」とも。クラシックコンサートは400回以上催しているが、毎回、赤字。そのたびにポケットマネーで補う。ホールでは来場者を迎え「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」と挨拶している。「偉そうなことを言いましたが、死ぬまで頑張ります。ホールでお待ちしていますよ」と締めくくった。